

## 平成 26 年度 第 3 回三重県経営戦略会議概要

- 1 日 時：平成 26 年 8 月 31 日（日）13:00～16:00
- 2 場 所：三重テラス 2 階・多目的ホール
- 3 出席者：白波瀬委員、田中委員、西村委員、沼尾委員、  
速水委員（座長）、宮崎委員、鈴木知事
- 4 議 題：（1）県民が生涯輝き続ける三重  
（2）内なる国際化

### はじめに

#### 鈴木知事：

- ・本日の会場である三重テラスは、9 月 28 日の 1 周年を前に、8 月 11 日時点で来客者数 50 万人を突破し、昨日時点で 52 万 9 千人の方にお越しいただいている。都内には自治体のアンテナショップが 55 か所あるが、その半分は来客者数が年間 20 万人未満であり、三重テラスはおそらくトップテンに入る拠点になったと思う。
- ・第 96 回全国高等学校野球選手権大会において、三重高校が県勢として 59 年ぶりとなる決勝進出を果たし、見事準優勝に輝いた。対戦相手の大阪桐蔭高校の監督はインタビューで「大阪代表である我々がアウェーかと思うような三重高校の応援だった」と仰っており、県民をあげての応援だったという思いだ。ちなみに私のフェイスブックでは、決勝進出時、準優勝時の「いいね」がそれぞれ 4,500 件、4,100 件と式年遷宮の時の 2,500 件を大きく上回り、ツイッターにも 1,200 件のリツイートがあった。多くの皆さんに関心を持っていただいたのだと思う。優勝を逃したのは残念だが、三重高校野球部にも新たな目標ができたと思うので、引き続き応援していきたい。
- ・国においても、内閣改造を機に、人口減少に対して本格的に取り組む体制になってきている。三重県としても、持続可能な地域として魅力を発揮していくためには、この課題を避けては通れないと考えている。今回の議題も関連するテーマを選んでいるので、何卒よろしくお願い申し上げたい。

#### 速水委員（座長）：

- ・今年度の会議は人口問題に絡めて議論を進めており、人口減少に対して明確な問題意識を持って議論をするということであったと思う。今回はシニア層や外国人についての視点で議論することになるが、高齢化、グローバル化の問題ということで、タイムリーな議論となるのではないかと思っている。

### 議題 1 県民が生涯輝き続ける三重

## ＜事務局より西田委員コメント紹介（口頭）＞

- ・議題1に関して3つ意見がある。
- ・1つ目は「三重ツーリズムの設立」である。三重ツーリズムを設立し、クラブ会員を組織化してはどうか。そして、三重県を訪問する観光客向けに観光ガイドの作成や観光ガイドボランティアを行うことで、個人がそれぞれの得意なところで歴史、文化などを紹介する見せ場づくりができるのではないかな。
- ・2つ目は「三重コルホーズの設立」である。三重県に株式会社化した集団農園を作り、シニアがワークシェアリングの形で働き、できた農作物を6次産業化によって販売し、その収益をシニアに支払っていくモデルである。耕作放棄地が広がりつつある中、それらの農地を三重県が借り上げることで、三重コルホーズモデルを構築してはどうか。
- ・3つ目は「三重県版アフタースクールの設立」である。東京のNPO法人「放課後アフタースクール」では、東京、神奈川の小学校などで市民先生がボランティア、低額・無報酬で放課後の先生を務めている。教育プログラムは学校教育に関係するものより、生活マナーや文化、スポーツや音楽など幅広い。これらは市民先生の得意な領域で実施されており、市民先生としての勤務体系にも相当の自由度がある。「三重県版アフタースクール」を設置し、シニア県民の組織化と就業体制を取り決め、放課後の児童への多様なプログラムを提供することで、シニアと子ども達と一緒に輝く社会を構築してはどうか。

### 速水委員（座長）：

- ・社会減や高齢化に関してはネガティブな話題が多いが、シニアに活躍をしてもらう場をどのように作り、どのように地域の力にするかということが非常に大事だと思う。今までは、お年寄りが楽しめる場所作りという考え方だったが、これからは、地域に対してどう貢献してもらうかを意識することが非常に大事だ。三重県において本当に素晴らしい状況を作れば、周辺のシニア層が集まる地域となることもできる。そして、お年寄りが明るく豊かに暮らせる地域は、一般的にも豊かな地域になるという視点も大事だ。

### 田中委員：

- ・当社のメディアでも、シニア向けに商品を売るとか、シニア向けのマーケティングなどをよく扱うが、アンケート調査をすると、「主役が自分達ではない」「自分達が主役になりたい」という声が、65歳以上の人達から出てくる。「私達はカラオケにも行き、焼肉も食べたい。子どもや孫の面倒をみる役割ではなく、お財布でもない」というのが彼らの本音であると感じる。
- ・シルバーやシニアとは言わないで、「ゴールデンエイジ」や「プラチナ世代」などというように発信して20年ほど経つが、まだまだ浸透していないのが現状だ。やはりこの年齢層が輝くということが若い世代にも希望をもたらし、

非常に重要だと考えている。

- 配布資料の後半にボランティア活動などの記載があるが、こうした活動もハードルが高いようにも感じるので、もっとカジュアルに、例えば毎日をお祭りやイベントにしていくような環境を県内の各地域に作ったら良いのではないかと思う。
- 先日、家族みんなで三重県総合博物館 MieMu に行き、施設のみならず子どもの教育にも素晴らしいと感じたところだ。  
見終わった後、施設内のホールで、高齢者の方がお弁当を持ってきて食べている光景を目にし、なかなか高齢者の方が集まるような場所がないのではないかと感じた。やはり行政が関わり、安心できるような場所を提供して、そこに行けば誰かがいるとか何かができるというような、高齢者の方が自分自身で判断して動けるきっかけとなる空間があればいいと思った。「ボランティアの人集まれ」とか、「こういう特技を持った人集まれ」ということではなく、自然な空間が準備され、そこで有益な情報が得られれば良いのではないか。
- シニア予備軍のことも重要だ。女性の場合は退職後、地域社会に比較的スムーズに入っていけるケースが多いが、男性の場合はそれが難しいことが多いと思われる。したがって、男性については、65 歳になる前の予備軍の人たちのスケジュールをとり、5 年刻みで「この年になれば考えること」など、段階を経て情報発信をすることと、自分が充実するために何をすれば良いのか等を考えられるような組織を作っていくことが、課題解決の一つの方法になるのではないかと思う。
- 当社もプラチナ社会に向けて、自分の得意分野を学び、生かすような教育プログラム企画を考えたりしたが、得意分野を生かす受け皿を見つけるのが難しいのが現実だ。しかし、そこはマッチングの問題ともいえるので、色々な人がマッチングに参加すれば可能性は出てくるのではないかと思っている。
- 今回の配布資料の中でも、健康寿命等考えることは数多くあるが、それらのことについて私が会社の中で、編集という立場で見てきて一番考えることは、主役であるシニアの方にきちんとスポットを当てた取組を行うことと、シニア予備軍への情報発信をすることの 2 点が、生涯輝き続けるという課題を解決するキーになるのではないかと思う。

#### 西村委員：

- 「ゴールデンエイジ」と呼ばれる方が、生き続ける限り主役でいたいと思うことは良く分かるのだが、脇役にならないといけないとも思っている。そうしないと次の世代は、いつまで経っても自分が主役になれない状況の下で、県外へ出て行ってしまおうということもある。長生きできるようになった幸せの裏返しというものを見なければいけない。上手く切り替えが出来ていないために、淀んだ状況になったという気もする。
- 世代交代でリセットされると何が起こるのかを考えると、私は楽観的な、

明るい見通しを持っている。何故なら、リセットしたところからやり直してみると、今の農業と漁業は儲かると考えているからだ。

例えば、県南部の人が持っている土地は平均2ha、米を作っても年間売り上げが260万円程度であり、時代が豊かになるなかで皆外へ出て行ってしまったのだが、高齢化による現役引退や人口流出によって1人あたりの土地が5～10倍に増えており、収入も10倍ぐらいになっているといった事例がある。漁業においても、多くて200～300万円程度の年収にしかならないが、これは今までの流通制度のなかで行っているからであり、中抜きされないよう直接取引をすれば、手取りで600万円程度の年収にすることは難しくないと思う。時代とともに制度が変わり人が減ったことを上手く利用して、若者達に希望を与える仕組みを作ることができるのではないか。

- 若者の新しい動きを止めるようなしがらみもある。世代の切り替えをしにくい都市部において、今後どう整理をつけるのかが問題になってくる。田舎では、必然的に人が住めない、収入がなくなるという理由で完全にリセットされ、若者達が元気になっているということもあるかもしれない。
- 昔の人口水準に戻すことは無理でも、「その土地の面積であれば何人が収入を得ながら住めるのか」を実際にきちんと見ると、住みつづける可能性があると考えている。私は行政の人達と「三重県南部藩」というものを想定して取り組んでいるのだが、県南部全体を1つの地域として考えた時に、その地域の面積や漁業権で一体何人が住めるのかということを計算すると、適正な人口が見えてくる。そこをリセットするような形で、20年程度かけて、200年続く地域を作るということを考えている。
- 貧しい日本を豊かにするために頑張ってきた高度経済成長期までのステージと、これから先の安定期におけるステージでは、やり方を完全に変えなければ駄目だ。切り替えが上手くできれば、次の世代には明るい未来が待っている。そこで、切り替えの時期に頑張ってきた世代を、どう幸せにするかということが問題になるだろう。これは過渡期における修正の問題なのかも知れない。今までやってきた主役には引いてもらい、次の主役はそのステージにおける過渡期のモデルになるのがいい。
- シニア層にはゴールデンエイジとして貢献していただいて、お金を持っている人達は堂々と使ってもらったほうが良い。三重県ならそこまで生活費はかからないし、たくさんある空き家を貸し出して上手くやれるのではないか。30、40年かかるのかもしれないが、その期間に成熟期に向けてのリセットをかけるために、膨れ上がってボーナスという形で貢献してもらってきた層を、オナズにつながらないように収束させる作業が必要だろう。
- 行政が考えるべきは、次の世代のために、ここまで豊かになった日本において適正な人口はどれぐらいで、どういう生活レベルを維持するかという社会設計だ。若い世代の生き方について土台を設計し、そこへの道筋を示した上で、活躍してきたゴールデンエイジには社会における役割分担を示すような

こともやっていくべきではないか。

**沼尾委員：**

- ・中山間地域などでは、家庭菜園で採れたものを直売所に持っていくと、それで高齢者（特に女性）が小銭を得られる仕組みがあるという話を聞く。当然、体を動かすので、健康にもつながるが、そこで入ってくる小銭を孫に小遣いとして渡せるなど、かなり生き甲斐にもつながっているようだ。
- ・サラリーマンが定年退職して年金と預貯金を取り崩す生活に入ると、今あるところからどんどん資産が減少していくので、マイナスの発想になる。それを何とか増やしたいと思って株などに手を出したりするが、国際情勢も流動的であり、株価がどうなるか非常に不安な状態にもなる。ところが、自分の身の丈でやれる家庭菜園のようなものであれば、作る喜びもあり、できたものを近所にあげると別のものになって帰ってくるし、さらにそれを直売所に出すと小銭にもなる。それは身の丈サイズなのだが、今ある年金プラスアルファの収入が得られ、気持ちの豊かさにもつながる。
- ・サラリーマンの定年を 55 歳から 60 歳に引き上げた時に、定年退職後に地元に戻って農業をする人が激減した。55 歳からであれば、まだ体を農業に合った形に作り直せるが、60 歳で辞めてしまうと、もうそこから農業を始めるというのは身体的に非常に厳しい。さらに定年が 65 歳になると、サラリーマンの人達が辞めて地元に戻った時には、もはや農林水産業に合った形に自分の体を作り変えるのは難しい。
- ・三重県出身の人が東京、名古屋、大阪に出て、そこから定年退職してから戻って、農林水産業で後を継ぐのが厳しいとすれば、少し早めに戻って後を継げるような仕組みを用意する方法もあるのかもしれない。I ターンで全然違う人々がコルホーズのように集まってやるという方法もあるかもしれないが、生まれ育ったところに鮭のように戻ってきて、そこで老後を暮らすのであれば、55 歳に戻ってきても 70 歳、75 歳まで働けるというような仕組みを、地元の資源を活かした形で作ることができれば良い。さらにそこで農林業のやり方を教えるということがセットされると、Uターンと地元の技能伝承と、さらに本来ならば定年退職で終わるところが、75 歳、上手くいけば 80 歳まで働けるかもしれない。
- ・男性の場合、定年して社会との絆が切れてしまうと、奥さんに濡れ落ち葉のようにくっつくか、行く場所がなく公共図書館などをうろうろするという話をよく聞く。シルバー人材センターという形での社会参加も良いが、もう少し地域と上手く関わって、小銭を稼げるような仕組みが三重で作れ出せないか。農林水産業や製造業の技能を持っている人であれば、それを生かせる道を考えれば良い。6 次産業化という話があったが、営業をやっていた人であれば、地元のをどうやって売っていくかというような場へ参加するやり方もある。

- ・「年金＋小銭＋社会参加」、すなわち、一定の所得を得ながら地域の中でつながりを持ち、地元の資源を大事に育ていけるような、三重県の地域での仕組みづくりと、それをサポートできるような政策が考えられてよい。

#### 宮崎委員：

- ・ある記事によると、高齢者は「シニア」や「シルバー」とは呼ばれたくないそうだ。私自身もシルバーとかシニアと銘打っている企画には行かない。特にアクティブシニアなどと言われると、そんな落ち着きのない年寄りはないだろうと思ってしまう。  
今、そのような人達を上手くマーケットに誘引しているのがヤマハだ。ヤマハは高齢者の呼び方として「大人」という言葉を使って、「大人の音楽レッスン」などと称している。高齢者はシニアではなく「大人」と呼ばれたいようだ。他にも「大人の超合金」や「大人のきのこの山」というのも出ている。
- ・テレビで見たが、高齢者のゴルフ場アルバイトというのがあるらしい。シニアの方がゴルフ場に早朝6時か7時に来て、芝刈りやグリーンメンテナンスをするというものだ。何故シニアかという、若い人と違って早く起きるからだ。早朝にグリーンをきれいにし、昼からはゴルフ場の練習場が打ち放題になるという。貰えるお金は安くても、タダで練習できるのでゴルフの技量が上がる。私も70歳になったらあそこで雇って貰おうかと思うくらい面白く感じた。
- ・高齢者は資産を持っているがなかなか使わないという話もある中で、大当たりしているのがJR九州の「ななつ星」という列車の旅だ。100万円を超える値段で温泉などを巡っていく専用列車だが、実は参加しているのは大金持ちではなくて、小金持ち、いわゆる普通のサラリーマンを退職した人々だ。何故なら、あれに1回参加すると、「あそこは楽しかったね、温泉行って良かったね」などと言って、1年間は夫婦の話題が持つからだ。そして、「また来年も行こうね」となって、十何倍という競争率になっている。
- ・農業で作ったものを6次産業化で海外へ出そうという若い人がいるが、実際はL/C（信用状）の書き方すら知らないのではなかなかできない。例えば、そういう時、総合商社のOBがいる四日市の「人財ポケット」で聞けば、彼らはL/Cなどいつも書いていたので、楽勝に解決する。そうしたマッチングが上手くいけば、若者は助かるし、OB達のプライドも満足することになる。
- ・当社では60歳で一度定年になった後に再雇用をしているが、その後の報酬は減る。その減った分で若者を雇い入れると、再雇用者と若者の2人で従前の1人前分くらいになる。そのペアで3年くらい経過すると、若者にも十分な技量ができる。こうすると、それほどコストは上がらずに済むし、また、再雇用者も若者を教えていくのも自分の仕事だというプライドが保てて、相互に良い結果となる。
- ・三重県のを海外に売っていく時には、海外にいる三重県出身の元商社マ

ン達にマーケティングの担当になってもらえば良い。もし、各国別に三重県出身のプロモーションのプロを作ることができれば、日本中にそんなことをやっている県はないので、1つの先進モデルになるのではないか。

- ・シニアの起業というのも、是非考えてほしい。若い人が新しく会社を起こそうと思っても、審査や個人保証など資金面で難しい。しかし、シニアにはある程度の貯えがあるので、ベンチャーを起こす環境としては若者よりはるかに有利だ。リスクを避けるという意味からベンチャー精神は若干衰えてきているかもしれないが、常識があり、いろいろな経験もあるのは強みだ。
- ・都会から三重県に、田舎暮らしに来てもらおうという考えがあるが、なかなか上手くいかない。私のところにも東京から遊びに来るが、遊びに来て1週間で、「ここで一生は暮らせないな」と言う。何故なら、買い物をする場所がない。例えば、コンビニに車で行くなんてことは都会の人はあり得ない。また、トイレも水洗でないと絶対に住まない。自然だけあれば都会から人が来るというほど、甘くはない。全ての人が田舎暮らしOKではなく、ある程度のインフラが揃っていないと、大人の方はこちらに移住してくれない。

#### **白波瀬委員：**

- ・田中委員が指摘したように、現役として役割を持つというのは、とても重要であると思う。特に60歳以上の高齢層になっても、個人的には現役でずっと勉強をしたいとか、向上したいという人は少なくない。その時に、他人は自分のことを年寄りのように扱ってくるので、その辺りのリセットが難しい。リセットする際に一番難しいのが既得権で、この既得権を一新するようなシステムを実社会の中で持ち、一方で、今まで社会で培った経験を生かすシステムをいかに作るかが重要だ。そういう意味で、若者優遇などのシステムはあまり良くないと思っている。つまり、子どもは親を見て育つので、親が培った経験も生かせず、一方で従来の既得権にしがみつくような中途半端な生き様であったら、その子どもはもっと中途半端になるのではないか。ノーベル賞の研究室からノーベル賞が出やすいのと同じで、そのような意味では、高齢化社会の中で先頭を走ることの社会的な責任というのはあるのではないか。ただし、その責任は既得権と一緒にになってしまうとつまらなくなることも事実なので、そのようなことは「かっこよくないよね」ということを仕組みづくりの中に入れておく必要がある。現状、待ったなしの少子化問題をはじめとして、既得権や既存のシステムの壁は本当に厚く物事が動かない。特に少子化問題は、1.57ショックから四半世紀も経っているのになかなか動かない。このようなことから、皆が同じように危機感を持って「リセット」を行えるのかということがカギになる。
- ・6次産業化については、三重県のポテンシャルはすごく高いと思う。6次産業化における生産・流通・販売になると、高齢者の今までの貴重な経験を生かすことができる可能性は高く、今後、上手く展開させる仕組みをつくるこ

とが重要だ。

- ・「動かない資産が多い」とずっと言われる中、その動かない資産をどのように動かすのかという点で、孫世代への教育資金贈与のことがあるが、これは社会学的にみると究極の不平等再生産と言える。おじいさん、おばあさんがいない人達にもお金を流すシステムを同時並行的に行わないと、中長期的な社会の姿は歪むのではないか。この点は少し工夫してやっていただければと思う。
- ・祖父母としての役割については、様々な世代の人が一緒にいるということは子ども達に刺激を与えとても良いことであり、これからアクティブなおじいさん、おばあさんが増えていくと思われる中、そのような方を十分活用できるような仕組みづくりが必要である。

#### **速水委員（座長）：**

- ・私の周りには、この年齢になって起業する者が多い。そこで見ていると、起業する環境が整っている場所でなければ、起業はできないという感じがする。三重県で、起業しやすい環境をシニア層に対してどう整えていくかがポイントだ。起業したシニア層は誰かを雇うので、孫にお金を渡すという形ではなく、社会に対して有効に投資をしていくという形が起きることにもなる。
- ・気になるのは、田舎でリセットを掛ける際の既得権の問題だ。田舎には、いくつか半公的組織があるのだが、そこでの世代交代は徹底されていない。県や外郭団体も同様だが、公的な組織は年寄りの既得権の形になってしまって、若者が前に出てくることを誘導できない状況にある。誘導できるのであれば年寄りがいても全然問題ないのだが、そうした組織を変えるのか、あるいは若い人達を活躍させるような仕組みを作るように教育をするのか、2つに1つだと思っている。もちろん若者だけでなくリセットする新しいシニア層に対しても開かれていなければならない。
- ・高齢になった時の交通手段も問題だ。都会に年寄りが集まるということが最近話題になっているが、バスも走らないような交通機関の不便な地域には人は集まらない。田舎には元々歩くことが不得意な人達が多いが、車にもいつまで乗れるか分からない。そういう点では交通機関をもう少し根本的に考えていかなければならないし、上手くいけば、お年寄りの方が三重県を魅力的に感じてくれるかもしれない。

#### **鈴木知事：**

- ・資産の移動という点で補足説明をさせていただく。現在、学齢期の子どもの進学など教育資金に充てるための資金 1,500 万円までは贈与税が非課税になる制度が利用されているが、全国知事会として国に次のような提案をした。
- ・まず、現行制度に①1,500 万円の限度額を 3,000 万円ほどに拡大する、②対象について例えば学齢期にない孫の結婚・出産・育児資金といったものまで拡

大する、③制度を恒久化する、という3つの改正を加えた、「結婚・子育て支え合い非課税制度」として、私や高知県知事が検討のうえ全国知事会から提案し、これは内閣府の概算要求や税制要求で盛り込まれることになった。

- ・さらに、現在のところ国には受け入れてもらえていないが、祖父母がいない子育て世代や子ども達にもシニア層の資金が回るための制度についても提言している。例えば、「死亡返還制度」という、シニア層の方が金融資産を持ったまま亡くなって相続放棄等がされた場合に国庫に返納する制度があるが、この返納分を低所得もしくは祖父母がいない孫への子育て費用などに特化した形で振り分けるような制度を作ってほしいと要望した。あわせて、同様の目的に特化した「子育て債」のようなものも制度化してほしいと提言している。

### 意見交換

#### 西村委員：

- ・今回は、各委員の意見がリレー式になり議論が盛り上がっていったので非常に良かった。
- ・白波瀬委員の意見を聞いて納得したのが既得権の話だ。人間は感情で生きているが、この感情をきれいに引き換えて既得権のしがらみからどう抜けるかということを整理すれば「大人になれる」とか、「第一期はこれで活躍されて、あなた達は二期目に入りますよ」という形で、シニア層にも名誉を与えられると思う。
- ・シニア層全員が農業をやるかということ、これは体力的にも大変だ。それに、50歳でリタイアして農業を始めるにしても、若者達から農業というものを奪ってしまう可能性がある。6次産業こそ複合的だと思うので、例えば商社OBと若者が組んで起業するような形で、役割分担を地域内でもしっかりやると良い。若者にはこれから土地がどんどん手に入るの、自分が思うような農業をやり、売り先については商社OBが世界に向けて売っていく。本当の意味で大人になった方が起業して、若者達を盛り上げるエンジンのような役割を担ってくれると良い。
- ・私は、いつまでも大学教授でいたくないと思っている。自分より上の人間がいなくなれば、必ず高慢な人間になってしまうからだ。どこかで一旦引いて、自分でリセットを掛けなければならないのだが、完全に引くのではなくて半リタイアのような制度があると良いと思う。半分の給料で良いので、年2、3回の海外出張ができる程度の費用をいただいて肩書きなしの大学教授を続けられれば、思い切って若者達を育てられるかなと考えている。そうした切り替えを、社会モデルとして三重県で作ってほしい。
- ・資産の問題について考えているのは、社会に対して寄付をした人間に、メリットがないということだ。「子どもへの教育資金の贈与については非課税だ」

たとえば、皆貯めていた資産を吐き出すが、それではタテ列にしかお金が移動しない。一方で、社会的に寄付した人には何もメリットがないので、彼らにメリットをつける仕組みが必要だと思う。例えば、退職金から 1,000 万円を寄付した人には、三重大学医学部の診察を優先的に受けられるといったようなことだ。極端な話かもしれないが、アメリカのサンシティというところでは、街に 60 歳以上の人だけを集めている。集まった人達は、医療サービスを受けられる代わりに、亡くなったら脳を検体として提供するという契約をしているため、街に最先端のアルツハイマー研究機関が集まっている。この例は 1 つの考え方ではあるが、誤魔化しながら皆平等にと言っているのは駄目だ。老後への不安に対して、解消の手段を提供する代わりに寄付をさせる。ただし、差別的という点で、行政としてどう設計するかという課題はあるかもしれない。

#### **白波瀬委員：**

- ・孫のためにならお金を出すかもしれない、というのは確かに一つのやり方だが、それだけでは困る。遺産についての税を設けると言い過ぎかもしれないが、遺産が社会に還元されるやり方が必要なのではないか。ただし、現物支給のように用途を限定する、または基金を作ってやるというような工夫が必要だろう。生前に寄付をすることで老後を保障してもらおう仕組みには賛成するが、寄付できる人が、できない人から妬まれないようにしなくてはならない。

#### **宮崎委員：**

- ・私は今、自分の持っているワインを若い人に分け与えるようにしている。自分 1 人や妻と 2 人で飲むよりも、若い人達と一緒に飲むという幸せを今味わっている。実はこれはワインだけではなくて、仕事も一緒だ。そういうことをやっていかないと、その次の世代につながらないので、これをずっと繰り返していきたい。

#### **田中委員：**

- ・高齢者の皆さんにとって、活躍のきっかけがなかったり、あるいは活躍できる能力に気が付かなくて眠っているケースがあるが、そういう方々が元気になる政策が必要である。地域の皆が集まるイベントで、例えば皆が 1,000 円なりの小さいお金を出して、その場で地域の産品を買い物して、ポイントを貯めて医療の特典が受けられたりとか、そこでモノが動くような仕組みを作っておくと、小金を持っているだけだという人も元気がでるのではないかと思う。
- ・自分の能力を生かして社会に貢献するといった時に、やはり地位の高い人であると、威張ったりお説教じみたりしてしまい、社会貢献を受ける若者が引

いてしまう。色々な経験をしていくと、プロフェッショナルな能力が身に付くんだということを子ども達にも分かってもらうために、カッコいい大人の「レジェンド」みたいな人を数多く作って、子ども達が「レジェンドから学ぼう」という姿勢になれる形を作れば、子ども達にもとっても力になるのではないか。

#### **沼尾委員：**

- ・地域それぞれのところで、若い人がいなかったり、あるいはリタイアして早めに戻って来たりと、状況はまちまちだ。その地域にはどういう産業やどういう人がいてほしいのかという話と、そこにどういう人が来られる可能性があるのかというところの組合せが大事だ。
- ・最近よく聞くのが、東京の病院を辞めた後に地域貢献で地元の医療に取り組みたいと思っている人を、一本釣りで医師不足の地区に配置するなどの動きだ。技能があって最後は地元で何か貢献したいと持っている人は、その他の分野にもいると思う。

#### **速水委員（座長）：**

- ・健康の問題について、市民スポーツをシニアの健康維持と上手く組み合わせられないかと思っている。三重県でも一時期、学校スポーツから市民スポーツへの切り替えに取り組んでいたが、私は上手くいっていないと思う。そこで、市民スポーツに対して、極端に言えば法人化した組織を地域で作って、そこで健康維持の役割も一緒に果たせるようにできれば良い。そうすれば、国民健康保険の支払額が減った分の何パーセントかを市民スポーツセンターにバックするような仕組みも考えられるし、国体に向かって選手強化をする組織を作って専用のコーチを雇うようなこともできる。ここに市町の栄養士さんとの連携などが加われば、かなりシニアの健康レベルが上がってくるし、一方で専門的なコーチができるスポーツ団体も組織化できる。スポーツはスポーツだけ、健康問題は健康問題だけと分けて考えては、シニアの健康問題は上手くいかないだろう。

#### **鈴木知事：**

- ・委員から具体的なアイデアをいただいて、どのようなシニア、大人をイメージするかで、取るべき出口についてはそれぞれ異なるのだと感じた。県の施策においても、どのようなシニア、大人をイメージし、何のために取り組むのかということを確認にして優先順位をつけなければならない。
- ・そもそも今回シニア層についての議論をお願いしたのは、1つには、人口減少下であらゆる人的資源を活用して、県全体の活性化したいということからだが、もう1つは、三重県が掲げている幸福実感日本一という点からである。毎年行っている県民意識調査において、一番幸福度の高いカテゴリーは3年

連続で 30 代女性となった一方、シニア世代の幸福感は 30、40 代と比べると高くない。役割分担のなかで、シニア層が自分の役割を感じれば、幸福実感を高めることができるのではないかと考えている。

## 議題 2 内なる国際化

### 鈴木知事：

- ・ 今回のアメリカミッションでは、ワシントン州シアトルとテキサス州サンアントニオを訪れた。今回のミッションの特徴として、1つ目は、人口増加率で全米トップのシアトルを含むワシントン州、経済成長率ナンバーワンと言われているサンアントニオのそれぞれとMOUを結んだことが挙げられる。私が知事として行く海外ミッションは、①県内企業が儲かる、②県内産品が売れる、③三重県の交流人口が増える、④三重県の企業や教育機関のレベルアップが図れる、といったことを目的としており、単なる友好ではない。今回のように、人口増加率、成長率が高い地域と産業連携のMOUを結んで、増大する需要を県内企業に取り込めるようにチャンスを作ることが目的である。来週からはインドを訪問するが、インドでも成長率の高い州と産業連携に取り組む予定だ。
- ・ 2つ目の特徴は、伊賀牛の初輸出をさせていただいたことだ。いきなりB to Cで販売したとしても、アメリカには様々な種類の和牛があり、埋没してしまうと考え、まずはB to Bでレストランやホテル、シェフに限定してレセプションを行った。ワシントン州は、カリフォルニア州に次いでワインの生産が全米2位であり、ワインとのコラボレーションも行ったところ、概ね高評価を得た。課題として、どれぐらいの価格で販売できるかという、流通も含めての指摘があった。シアトルでは照り焼きが流行っており、モモの部分を照り焼きにしてシアトル風にしたのだが、肉質がよいので何にも付けないサーロインのほうが高評価を得ていた。
- ・ 3つ目の特徴は、全米トップクラスの高等教育機関や研究機関との連携だ。三重県の国際展開の特徴としては、官官、学学、産産それぞれで連携をするということが挙げられる。今回のミッションでも、三重県とワシントン州、サンアントニオのような官官における連携があり、次いで三重大学とワシントン大学医学部のような学学の連携、ビジネスが広がっていくように産産の連携という形を取った。
- ・ 4つ目の特徴としては、同行企業において、訪問先の航空関係企業との取引が決まっていたことだ。かなり具体的に企業のビジネスチャンスにつながっていた。
- ・ 早速、9月25日にサンアントニオから訪問団が20人ぐらい三重県に来ていただくことになり、非常に交流が深まった良いミッションだった。

## 西村委員：

- ・海外ミッションは大抵過密なスケジュールなのだが、県庁職員がだいぶ慣れてきたように思う。官官、学学、産産の連携というやり方に、雇用経済部が非常に慣れて、海外との上手いつなぎ方をできるようになった。そのため全ての案件が次につながってしまい大変になったとは思っているのだが、そういう意味では今回の成果として上がったのだと思う。
- ・一方で心配事として考えているのが、産業連携に対する渉外活動は雇用経済部が上手くできるのだとしても、ホスピタリティ、おもてなしまで雇用経済部が行うと、潰れてしまう可能性があるということだ。三重県に訪問団が来た時のおもてなしや、こちらから訪問した際のグリーティングの仕方といった人的なところのつながりについて、専門に行う部署が必要だ。そういう部署を作って、三重県は凄いということを他の県に見せ付ける段階にあると思う。

## ＜事務局より西田委員コメント紹介（口頭）＞

- ・視点1「さらなる海外誘客」については、大分県にある立命館アジア太平洋大学（APU）の例にあるように、三重県においても地域の民間企業からの協力を得ながら、海外大学の誘致に可能性があると考えている。今後はアジア、例えばインドなどの新興国の主要大学に対し、日本への留学制度を提案することもできる。三重県の高度な産業技術の魅力は新興国の主要大学にとっては自校のプログラムを充実させ、学生に対するマーケティングツールともなる。海外大学のマーケティング施策にまで踏み込んだ検討を行うべきだ。三重県企業技術部門へのインターンも含めた派遣型留学プログラムも、優秀な東南アジア、インドの外国人の誘客策として有効だ。
- ・視点2「外国人住民の地域社会の担い手化の促進」については、三重県内に英語の公用語化特区を設定し、三重県内の外国人住民が不安なく生活できる地域を設けてはどうか。日本のグローバル化の必要性から、企業内でも公用語としての英語を採用しているケースが増加している。県内の特定地域において、日本語に加えて英語を公用語化し、特区内での企業、学校、公共サービス、商用施設などで英語の使用を促進する。併せて、外国人移民促進策、公立学校での放課後英語学習サービス制度（英語ネイティブ市民によるボランティアなどを含む）を作ることも有効だ。
- ・視点3「高度外国人材の呼び込み」について1つ目の意見は、海外の大学等での「サバティカル」（使途に制限のない職務を離れた長期休暇）を取得する教授・研究者の長期滞在先として、魅力ある生活インフラを整備するとともに、学会とのつながりも適度に維持できる環境を、県内の三重大学を中心とするアカデミアと行政が協力して提供することで、海外からの高度人材の獲得を図る。また、こうした海外人材の子弟の教育の場としても、前回の三重

県経営戦略会議で提案したように、国際バカロレア資格が取得可能な全国初の公立学校を設立することが望ましい。

- ・視点3「高度外国人材の呼び込み」について2つ目の意見は、高度外国人材の呼び込みとして世界的レベルの高度の研究機関の設立の検討である。例えば、高等教育機関を都道府県が誘致したケースとして、兵庫県のスプリング・エイト（播磨科学公園都市）、あるいは兵庫県と神戸市の理化学研究所の例があり、BSL（バイオセーフティレベル）4の設置は現在、長崎大学が検討している。市の誘致事例として、BSL3ではあるが、川崎市の国立衛生研究所の事例がある。三重県においても、高度研究機関の誘致として可能性のある分野の検討を進めることも提案したい。

#### **速水委員（座長）：**

- ・三重県は外国人住民の占める割合が全国3位ということで、かなり高いようだが、例えば、東京オリンピックに向かっての交流人口の増大に対し、どう対応していくのか、あるいは観光者や技術を学ぶ人達を含めて、交流人口をどうやって増やしていくかということについてご議論いただきたい。それから、高度人材を県内に呼び込むことについても議論をしていただくが、私の意見としては、実際に今いる外国人が快適に過ごせなければ上手くいかないだろうという気がする。

#### **白波瀬委員：**

- ・海外の方に来てもらうツーリズムについては、三重県のポテンシャルは凄く高いと思う。知事が海外に行かれた時に、高校生などでも「おもてなし」においてプロフェッショナルレベルでできるようにすることは重要である。今、様々なところでグローバル化や国際化ということが言われているが、インフラ整備が片手間のところがあり、結局は担当している方が疲弊している状況になっている。それについて展開するような組織づくりをしていただければと思う。
- ・三重県にこれだけ多くの外国人がいることは知らなかった。三重県ではブラジル人が多いが、全国的にみれば中国人が多い。そういう意味では三重県は少し特殊であると思う。外国人が住むにあたってインフラ整備は重要で、災害の時なども日本語を母語としない方が困らないように、すべての局面において整備するようにしていただければと思う。また、外国語教育のところでも、特別に何か支援してあげるような仕組みがあると、子ども達にとっては凄く良いことだと思う。特に小学校レベルでの多文化共生については、様々な文化背景を持った子ども達が一緒にいるなかで、言葉ができない子どもは主役になれないケースが多い。しかし、自分の国の食事や祭り、文化のことを報告するような場を作ることで、それを知らない子ども達も面白がるし、仲間に入るきっかけとなるため、そのような授業をもう少し積極的に展開す

- る場を設けることが、三重県によって良い形につながると思う。
- 高度人材については、国立大学法人レベルで高度な人を雇い入れるために市場競争しようと思うと、大きな足かせになるのが人事体系であるため、人事体系をもう少し柔軟にして高度人材の引き抜きができれば良いと思う。また、ここでの高度人材というのは外国から留学し定住化した高度人材を雇い入れることを想定しているのか、海外からヘッドハンティングして高度人材を招き入れることを想定しているのか、そこについては優先順位をつけた方が良いと思う。私が所属する東京大学もそうであるが、やはり優先順位をつけないと組織が疲弊してしまう。そういう事業を行う部署はあるが、連携など様々な仕事で忙殺されている。

### 宮崎委員：

- 食については、伊勢は伊勢うどんだけではなくて、フランス料理屋の街とも言え、食の都市、グルメ都市という色合いがある。伊勢神宮は20年に1回しか沸かないので、毎年沸くためにはスペインのバスク地方・サンセバスチャン化だ。人口あたりで最もミシュランの星の数が多い都市だが、そういう方向付けをしてはどうか。
- 学びについては、日本から海外へ行っている留学生が少なくなっているが、日本の大学に来る留学生も少なくなっており、「ジャパン・パッシング」の非常に深刻な状況だ。海外の有名大学の分校を是非、三重県に誘致していただきたい。もし、マサチューセッツ工科大学などが来てくれたら、東南アジアなどの人にとっては、アメリカへ行くよりはるかにコストが安いので来るだろう。そういうことを日本で最初にやると大変面白い。
- これは学びと非常に密接に関係があるが、例えば日本で初めての病院というのを考えてはどうか。都市の病院では、エグゼクティブフロアなどに入っている人とはほとんど面会できない。皆、入院していることを誰にも知られたくなく、秘密で入っているからだ。絶対に人が来ない方が良かったら、南勢地区の病院ならば誰にも分からないので、ちょうどいいのではないか。
- どんな病院を作ってほしいかという、アメリカでは現実にあるようだが、遠隔手術病院だ。光ファイバーくらいの回線があったら、アメリカから手術できる。アメリカの有名な外科医が、遠隔的に三重県南勢の病院で外科手術ができるような、先端的な病院を是非とも三重県が最初にやっていただきたい。
- スポーツについては、海外サッカーのセリエAやリーガエスパニョーラなどのサテライトチームで良いので、合宿やキャンプをやれば、日本中から見にくるだろう。仕事で冬に宮崎に行くことがあるが、宮崎は巨人のキャンプだけでなく、サッカーの多くのチームがキャンプをやっている。日本のJリーグファン、サッカーフリークが大勢来ている。
- 韓国、中国から日本にスポーツをやりに来る人で、圧倒的に多いのはゴルフ

だ。韓国は人口の割にゴルフ場が少ないので、ゴルフツーリズムのような形で日本に結構来ている。三重県は是非ともこれを前面に出して、韓国、中国からゴルフ客を招いてはどうか。

- コンベンションには場所と人が要る。同時通訳ができるような会場がない限り、コンベンションをやろうと思っても無理ではないか。そこで、是非とも海外ブランドホテルを誘致してほしい。東京では、来るたびに新しいホテルがオープンしており、稼働率も8割くらいあるという。それも10万円くらいの部屋がよく売れているらしい。前にも言ったが、シャングリ・ラ、ペニンシュラ、マンダリンのいわゆる新御三家、これらは日本の地方には1つもない。伊勢の駅前にシャングリ・ラがあったら皆行くのではないか。今のホテルを磨くのも良いが、磨いてあるものを他所から連れてくるという発想もいると思う。
- 世界ではエボラ出血熱が大変なことになっており、日本でもデング熱が出て問題になっているが、これから海外の人を招き入れたり、日本人が外に出ていくにあたっては、こうしたことが大きなリスクになる。大企業の人が出張する時には大変手厚いリスクマネジメントができていると思うが、中小企業ではそうはいかない。中小企業が海外へ行くという時に、そういうリスクマネジメントと同時に、講習などに資金的な援助をしないと、かなりリスクが高いように思う。
- 日本に来る外国人については、来る時だけではなく、外国に滞在している間にワクチン接種を厳密にやっているかどうかという証明も必要だろう。日本は今まで経済状況で外国人労働者を入れたり、帰したりといったことをしてきたが、そのようなやり方は、これからはもう通用しない。グリーンカードを導入して、日本語教育を何年間もやった方が日本に入って来て、もちろん疫病のリスクヘッジをきちんとできた方を入れるという時期が、いずれ間違いなく来るのではないか。

#### **沼尾委員：**

- 海外では和牛というものはあるが、松阪牛とか伊賀牛という名前までは出ていない。そういう名前が浸透してくれば、海外からでも、日本でそれを食べられる場所に行きたいということにつながるのではないか。
- 海外誘客も、地域社会を担う外国人住民もそうだが、地域の中で外国の方々と交流をしたり、互いを知るといような場をしっかりと作っていくことが重要である。例えば別府市では、市民が「ハットウ・オンパク（別府八湯 温泉泊覧会）」という仕組みを作って、立命館アジア太平洋大学（APU）の留学生を入れながら、地域の伝統文化の継承活動や棚田の復元など地域のいろいろな活動を一緒にやっている。それが地域も元気にするし、留学生がさらに別府を好きになるという、凄く良い好循環を作っている。
- 浜松市や群馬県大泉町では、日系ブラジル人の人々との相互理解に相当苦勞

している。特にブラジルでのワールドカップが決まった後などは、世帯主だけがブラジルに帰り、家族だけ日本に残るような事態が続出し、生活保護の受給者が増加した。残った家族への仕事のあるせんや社会参加、公営住宅のゴミ出しルールなど、自治体、町内会・自治会、NPOはどのように相互理解を図るかで苦労している。こうした例を見ても、地域に住んでいる人々がどうやって外国人を受け入れ交流していくかという、しっかりとしたベースがないと、外から入ってくるのは良いのだけれど、表面的な交流で終わってしまわないか心配だ。

- ・ハードの面で言うと、三重県の状況は分からないが、東京でもフリーWi-Fiがないということで、今、外国人が凄く困っている。逆に今、Iターンで移住が増えている徳島県の神山町などは、徳島県が高速ブロードバンドを全県で入れているので、山の中でも高速で通信ができて、映像でも何でもやり取りができる。神山町は山深いところだが、海外の方も移住してきており、きれいな空気、水、自然の中で良いアイデアが出て、良いビジュアルの映像ができて、それを海外や東京に配信している。このように海外からIターンで呼んでいるという地域もあり、高速ブロードバンドのような仕組みをどういうふうに全県で幅広く入れていくのかということも考えていく必要がある。

#### **西村委員：**

- ・大学については、世界で一番でないとは来ないと思っている。スタンフォード大学やMITを呼んでくるということは、自分達が世界一ではないと思っていることの表れではないか。なので、大学がもっと自身がやってきたことに対して誇りをもって、厳しくしたほうがいいと思っている。
- ・最近考えているのは、むしろ大学を誘致するのであれば、プノンペン大学や台湾の大学などアジアの伸びてきている大学はどうか。彼らにとって、アジア地域における日本というのは憧れの地だ。日本人は、アメリカやヨーロッパに憧れていた時代をまだ引きずっている。それは止めて、自分達が世界で一番の地域であり、舵を引っ張っていくのは自分達だと信じて、例えば三重大学がプノンペン大学を誘致し、プノンペン大学の学生は三重大学で学べるという仕組みをつくるのはどうか。私はよくコラボレーション・ハブという言葉を使うのだが、アジアの主要大学が三重県に来て、アジアの頭の良い人が集まり、そして、ここがカウンターパートとしてMITやパリ大学と対等に話をするとすると面白いかもしれない。
- ・考え方を改めて、三重県は世界で一番の地域なので、世界で一番のことを他の人にも教える場を提供する、というやり方もいいかもしれない。ライフイノベーション総合特区に取り組んでいて思ったのだが、彼ら是对等な立場として交渉したがっている。今回、ワシントン州立大学に行った際、彼らの最先端の研究を三重県でできるかという話になったのだが、それは出来なかつ

た。少し違う話だが、ライフイノベーションにおいて、海外の企業を誘致するということは、人材の面から今の体制では無理だ。企業を呼ぶための自覚を持ったプロフェッショナル集団を三重県に作らないと駄目だと考えている。三重県にはそれだけの素材が全部あるにも関わらず、誇りを持ってないでいる。理想を言えば、自分達が世界で一番であるという振る舞いをするために、体制をきちんと作らないといけない。

- 三重大学では、国際交流がまだほとんどできていないが、海外と対等な立場で遣り取りするための誇りを最近持ち始めている。私個人が行っているケースでほぼ対等に交渉ができているのは、向こうが対等だと見てくれるからだ。世界で一番の場所として、アジアをリードして世界と対等に話をする必要があると思う。

#### **田中委員：**

- 資料から、三重県が全国的にみても国際的であることが理解できた。この特性を生かして、様々なイニシアティブが取れるのではないかと思った。まずインバウンドにおいては、知事のトップセールスで台湾など様々なきっかけを作っていたので、地域の人を中心となって、地域間を連携した新ゴールデンルート、例えば台北と三重のルートとか、そういう国を超えるルートを作ってプロモーションすることを行っても良いのではないか。
- ブラジル人住民が凄く多いので、住んでいる人の友達や親戚を連れてくるのが手っ取り早く、有効な手立てであると思う。また、他県では外国人が SNS などを利用して、その土地のことについて日本人が思わないようなことを情報発信している。三重県でも、ブラジル人の視点で三重県を YouTube などで紹介、発信すれば、ブラジル現地の人も見てくれて、親戚の人も「行きたいな」という格好になるのではないか。そして、そこに行政が応援できるような仕組みをつくり、盛り上げていくことが出来れば良いのではないか。
- 東京五輪については、当社でも 2020 年に向けてどのような事業ができるかということを考えているが、皆で言っているのは「ビヨンド東京」ということで、五輪の次のことを考えようとしている。その時に、選手を積極的に地域に呼んでキャンプやトレーニングをしてもらい、県ごとにスポーツを強化していくようなプロジェクトについても国などと意見交換している。それを早く進めて、選手に地元の食でおもてなしをするなど、2020 年前後のストーリーを今から作っていくことが重要だ。また、どこかの国を呼ぶのに、今からその国の言葉やその国の方々に対して「おもてなし」をアピールできるよう、プロジェクトチームが作れば良いと思う。三重から世界へのおもてなしのマナーを発信していくことができれば、五輪でイニシアティブをとることができるのではないか。
- 学びについては、以前にもこの会議で話に出ていた、「食のハーバード」と呼ばれている CIA（カリナリー・インスティテュート・オブ・アメリカ）が

三重県と親和性もあると思われ、連携できれば良い。「食」で1つ連携できると、健康や医療など全部につながっていくので、これは「美し国」三重にしかできないことではないか。産業界にも食の有名な企業がたくさんあるので、これが1つのきっかけになると思う。色んなことを誠実にやっていくのと同時に、分かりやすい打ち上げを行うことも必要だ。

#### **速水委員（座長）：**

- ・私の娘が、研究の傍ら、外国から来られた教授の秘書をやっているのだが、「東京でも、銀行や役所の窓口で英語を話せる人が1人もいない」と嘆いていた。それを思うと、三重県が国際化を考えるのであれば、銀行や役所には必ず英語を話せる人を窓口においておくというようなことをやっていかなければいけない。お金を下ろすというのは凄く大事なことであるにも関わらず、ATMでカードが使えるのかどうかを英語で説明してくれないこともあるし、ミスをして簡単には分からない形になっており、凄く不便だ。そうした身近なところからきっちり解決していくという姿勢を持つことが大事だと思う。公のお金が入る部分は、最低でも英語+ポルトガル語といったように、外国語表示を県がやっていかなければならない。
- ・観光に関しては、交通手段がタクシーだけでは人は増えないと思うので、歩くということを大事にしなければならない。熊野古道で向こうまで歩いて行って、戻ろうとした時に戻る手段がないということがあつた。そういう、歩くということを前提にもう一度道路をしっかりと見直すことが必要だ。歩道が突然切れて、交通量のある国道を渡って向こうの歩道に行かなければならないというように、昔から問題だと言われながら国交省も県も解決をしないということは、外国人誘致という視点から見ると、ユニバーサルでもないし国際的にもなっていないという気がする。
- ・熊野古道世界遺産登録10周年に関して、和歌山が頑張って和歌山の熊野古道をミシュラン・グリーンガイド・ジャポンの3つ星に持ち上げた訳だが、高野山もミシュランの3つ星になったことでフランス人の観光客が増えていることを踏まえると、そうしたターゲットをもって情報発信をすることが必要なのだろう。地元の自治体と一緒に外国語表示に取り組んだり、市町村地図を英語化したりして、それを外に情報発信すれば、あとは口コミでかなり効果は出ると思う。

#### **西村委員：**

- ・三重県の人達は、自分達の住んでいるところを良く知っていないと思う。私は漁連やJAと一緒に「鳥羽マルシェ」というものに取り組んでいるのだが、何回も鳥羽に行くなかで、鳥羽の浜などは海外の著名な観光地にも十分勝てる程に、凄くきれいに感じた。もっと、三重県の人々が三重県のもの世界的なレベルを知る機会を、県が作ってあげても良いと思う。

- ・これまで、日本の経済は、世界に追いつけ追い越せで回復して、追いつくことができた。もともと、それ以前に、日本が元々持っていた文化度の高さ、気候帯もある。自然は世界でトップレベルだ。もっと自分達に対して誇りを持つということを、国際化の前にやるべきだと思う。外国人に対して、お国自慢のような形で誇りを持って接すれば、観光にもやって来ると思う。

#### **速水委員（座長）：**

- ・アラスカやハワイの先住民は皆、日本のアニミズムに憧れている。何故なら、日本が環太平洋において白人に支配されていない唯一の国だからだ。彼らにとって日本という国は精神的に大事な国になっている。今さまざまな信仰が行き詰っているところに、アニミズムをもう一度見直したいという若者が世界的に増えていることも事実だ。そうした精神的な変化を、紀伊半島地域はまだ全く使えていない。これをしっかりと使っていく、あるいは我々がそれをどう評価していくかということがポイントであり、宗教とは離れた信仰なので、行政としては扱いやすいと考えている。

#### **鈴木知事：**

- ・具体的なお提案をいただいた中で、まだ公表できないがいくつか取り組んでいる案件もあり、良い報告ができるようにしっかりと頑張りたい。
- ・田中委員が仰ったC I Aには、3年前にサンアントニオ校ができたので、そうした部分の連携もできるのではないかと考えている。
- ・沼尾委員が仰ったW i - F i だが、今回の遷宮を受けて、伊勢の観光地を中心に整備費用を出させていただいた。また、今回の熊野古道10周年にあたって、携帯関係キャリア3社に対して、熊野古道周辺の携帯不通地域を具体的に示し、この時期までに改善して欲しいという要望を出させていただいている。このほか、私が中経連主催の懇談会で国交省の観光担当副大臣にお願いしたのだが、パスワードなしでフリーW i - F i ができるようにして欲しいということを国に要望した。総務省と国交省、観光庁がしっかり連携して取り組んで欲しいとお願いしたところ、早速総務副大臣に連絡していただいて、両省で勉強会を開くことになった。そこは、我々もしっかりフォローアップをしていきたいと思っている。
- ・資料の4ページに、ブラジルのマルチビザのことを記載しているが、これは昨年我々がブラジルを訪問して、日系人の方々の故郷に戻りたい、故郷と交流を深めたいという熱い想いを受けて各省庁に要望したものだ。この結果、今回安倍総理が訪問されたタイミングで、マルチビザの導入を決めていただいた。三重県の本年度予算ではブラジルの観光エージェントを招聘する事業もあり、様々なインバウンドのなかでも、三重県と親和性のあるブラジルに対しては特徴のある取組をしっかりとやっていこうと思っている。
- ・西村委員の意見については、一緒にアメリカを訪問したこともあって具体的

にイメージできた。誇りを持つことに加えて、言い切ることも大事かなと思う。つまり、私達はイマイチだ、ではなくて、三重県は世界一だ、三重県はいいところだと言い切ることも大事だと思った。

- ・白波瀬委員が仰ったように、何を一番にしていくのかという優先順位付けについては、これからしっかり議論して決めていかなければならないと思う。
- ・速水座長や沼尾委員から仰ったような、生活の身近なところをしっかりと検討していくということは、宮崎委員が仰った感染症のリスクマネジメントも含めて、身近なことを解決していくことが大事だと改めて思った。そういう部分について、県は対応が十分手を付けられていないところもあるし、基礎自治体に任せてしまっているところもある。そうした点については国際化を議論する以上はしっかり考えていきたい。

**速水委員（座長）：**

- ・国際化にしても、シニアの人達が豊かに暮らせる状態をどう作るかということにしても、日常的な工夫から思い切った方法という位置付けまで段階的なステップがあるのだろうと思っている。ただし、時間がないことも事実で、ステップをしっかり踏んでというよりは一気に進めていかなければならない。県が方向性を示して、この方向で行こうと声を掛けると、市町村行政を含めて各機関は動きやすいのだろうと思う。

以上